

『日本のいちばん長い日』再読

半藤一利著『日本のいちばん長い日』(文芸春秋)を再読した。この本は、昭和20年8月15日正午からの、昭和天皇による終戦勅語の放送(いわゆる玉音放送)が行われるまでの経緯や関連して起こった事件を再現したものだ。8月14日の正午から1日間の出来事が中心になっている。歴史学者が書いたものではないが、生存していた関係者へのインタビューと綿密な資料調査に基づいているので、これ以上真相に迫る記録は今後も書けないだろうと思われるものだ。

この本の出版には普通でない経緯があった。私が持っている本は1995年6月25日第一刷のものだが、実は同名の本がその30年前の1965年7月下旬に文芸春秋から出版されている。1965年当時、著者の半藤一利は文芸春秋の出版局次長職にあったため、著者の名前を表に出さないことになり、当時圧倒的な影響力もっていた評論家大宅壮一編ということにして、その本は出版されたのだ。その本はよく読まれたようだ。映画化もされたそうだが、私はその映画については知らない。その映画が上映された時期と私が海外に居た時期が重なっているからだろう。この本の内容に関連して私が記憶しているのは、関係者を呼んで真相を探ろうとするテレビ番組(多分NHK)があったことだ。何回かのシリーズで、大宅壮一が司会者だったと思う。その番組で、終戦から20年ほど経っていたのに、初めて明らかになったこともあったと思う。このテレ

ビ番組については、この本の後書で何故か触れられていない、

この本に書かれていることで、一番驚くことは、昭和20年8月14日に陸軍の中佐、少佐、大尉クラスの中堅・若手将校が皇居[当時皇居という言葉は多分なかった。宮城(キュウジョウ)と言った]内に押し入って、宮内庁などを占拠して、天皇が放送用に朗読された勅語を録音した録音盤を捜索したことだ(8・15事件また宮城事件と呼ばれる)。この目的のために、事もあるうか、天皇守護を使命とする近衛師団の兵士たちが動員され、天皇のお住まいとなっていたお文庫にまで機関銃を向けていたのだ。

天皇による勅語朗読とその録音は宮内庁内の一室で8月14日が終わる直前の夜中に行われた。その録音盤を翌日の正午までどこに保管するかが問題になったが、結局放送局など外部に持ち出すことはしないことに決まった。これは陸軍の一部に不穏な動きがあるという噂があったことによる。そこで、宮内庁内で目立たぬところにしまった。その場所を知っている人は僅かだったようだ。それは成功して、近衛師団の兵士たちは、録音に立ち会ったかなり多数の人たちを拘束しながら、録音盤を奪取することはできなかったのだ。

近衛師団の兵士たちが動かされたのは、偽造の師団長命令が15日の午前2時ごろ作成されていたためだ。その前に、近衛師団長の森赴(たけし)中將は畑中少佐により拳

銃で撃たれ、更に剣道五段の大尉によって斬殺されていた。森師団長は、既に天皇の意思がポツダム宣言受諾であること、陸軍大臣の阿南惟幾(これちか)大将もそれを受け入れて、全陸軍に天皇の意思に従うよう命令したことを知っていたので、畑中少佐らの玉音放送阻止の動きは天皇への叛逆を意味するとして、はねつけたのだろう。この惨劇が起きたのは近衛師団司令部の師団長室だが、この建物は現存しており、東京国立近代美術館工芸館となっている。

結局、森師団長を殺害したことで、事件はあっけなく終わった。それは近衛師団の上部機関である東部軍の司令官田中静壹(しずいち)大将が森師団長殺害を知って、事件鎮圧に乗り出したからだ。森師団長や田中東部軍司令官のように、非常時に常識をもって行動する人が要職を占めていたことは幸いだった。田中大将は、その後、事件の責任を取って自決している。森師団長殺害の現場にいた数名の将校も自決したが、ひとりだけ戦後を生き延びた人がいた。それがわかったのは戦後30年も経ってからだ。深く関わっており、現場のすぐ近くにいた一中佐は、自決するつもりであったが、しそびれて91歳まで生きた。

畑中少佐は抜群に行動力のある人だったようだ。この人がいなければ、事件はあそこまで進むことはなかっただろう。この人や事件にかかわった数人の将校は昭和10年ぐらいから平泉澄(きよし)東大文学部教授の皇国史観を信奉し、個人的にも平泉の教えを受けていたようだ。昭和10年代には、皇国史観がもてはやされ、その唱導者としての平泉は陸海軍に多数の信奉者をもっていた。阿南陸軍大臣もそのひとりだったと言われる。

平泉の専門は日本中世史だが、戦前・戦中に軍関係の会合で頻繁に講演していた。ひっぱりだこだったと言えるほど多忙を極めたようだ。終戦直後に辞職して、自分の出身地である福井県に戻り、家業ともいえる白山神社宮司となった。平泉は戦後も右

翼などに一定の影響力を持っていたようだ。多くの著書を出版しているが、現時点で影響力を持っているものはない。しかし、彼の思想は靖国神社、君が代、日の丸などが問題になるときに今でも顔を出す。この人物については、今回とは別に、「ひとこと」でも取り上げてみたいと思っている。

皇国史観には学問的裏付けはほとんどない。歴史学の専門家ではないが、私はそう思っている。むしろ宗教に近いものだが、イスラム原理主義やキリスト教原理主義のような国際性もない。しかし、日本では、将来もある条件のもとで、大衆を惹きつける皇国史観鼓吹者が現れると、復活する可能性もある。

昭和20年8月15日は、全国的に暑い日だった。今年の8月15日も暑い日となることは間違いない。(おわり)